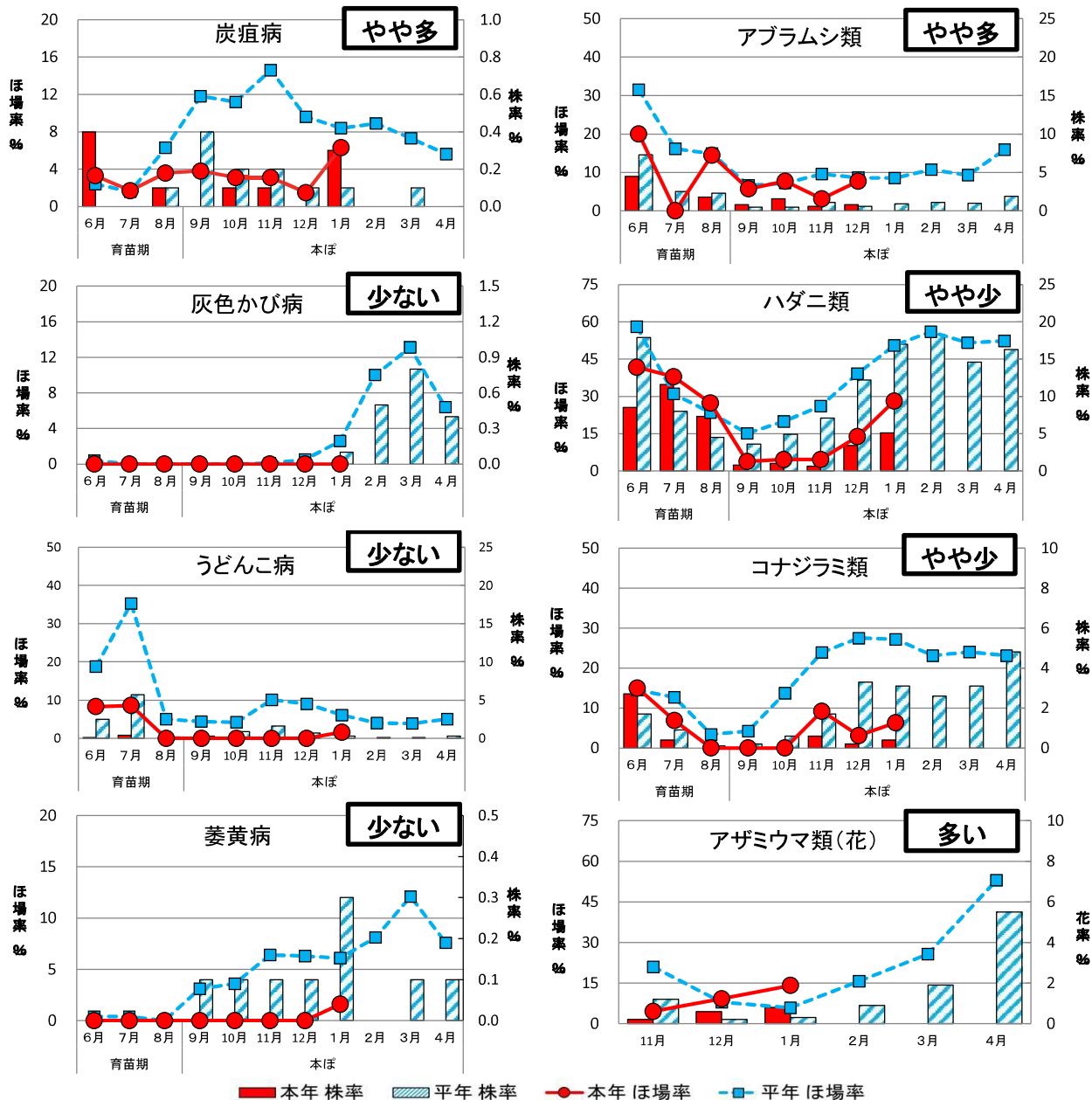


いちご病害虫情報第8号（1月）

令和6（2024）年1月19日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：64か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー アザミウマ類の対策 ー

平年より多く見られています。発生を認めたら防除を行い、被害の拡大を防ぎましょう。

- 1 低密度のうちにカウンター乳剤(I:15)等を散布する。観察した花の1割以上にアザミウマ類の寄生が見られる場合は、速やかにスピノエース顆粒水和剤(I:5、カブリダニ等の天敵に影響があるので注意する)等を散布する。
- 2 青色粘着トラップを設置すると、発生及び侵入状況を早期に知ることができる。
- 3 同じ薬剤であってもミカンキイロアザミウマとヒラズハナアザミウマでは防除効果が異なる。また、薬剤感受性の低下を避けるため、必ずRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

■ 今月のトピックス 灰色かび病

被害症状について

灰色かび病は、果実、ガク、果梗、葉、葉柄を侵し、灰色のカビが密生します。果実がもっとも侵されやすく幼果が侵されると、病斑は速やかに果実全体に広がり、褐変あるいは黒褐変し、多湿のときには、軟化腐敗します。枯死した部位や、古葉、収穫後の果梗、果実にも発生します。

曇天、降雨が続くと発生が広がりやすく、特に例年2～4月頃の発生が多くなるので注意しましょう。

収穫後に、流通段階で発病、腐敗することがあるため選別に注意しましょう。



果実の病斑



果実全体に密生する灰色のかび



花弁が残る果実の暗褐色初期病斑



葉柄の基部に発生した病斑

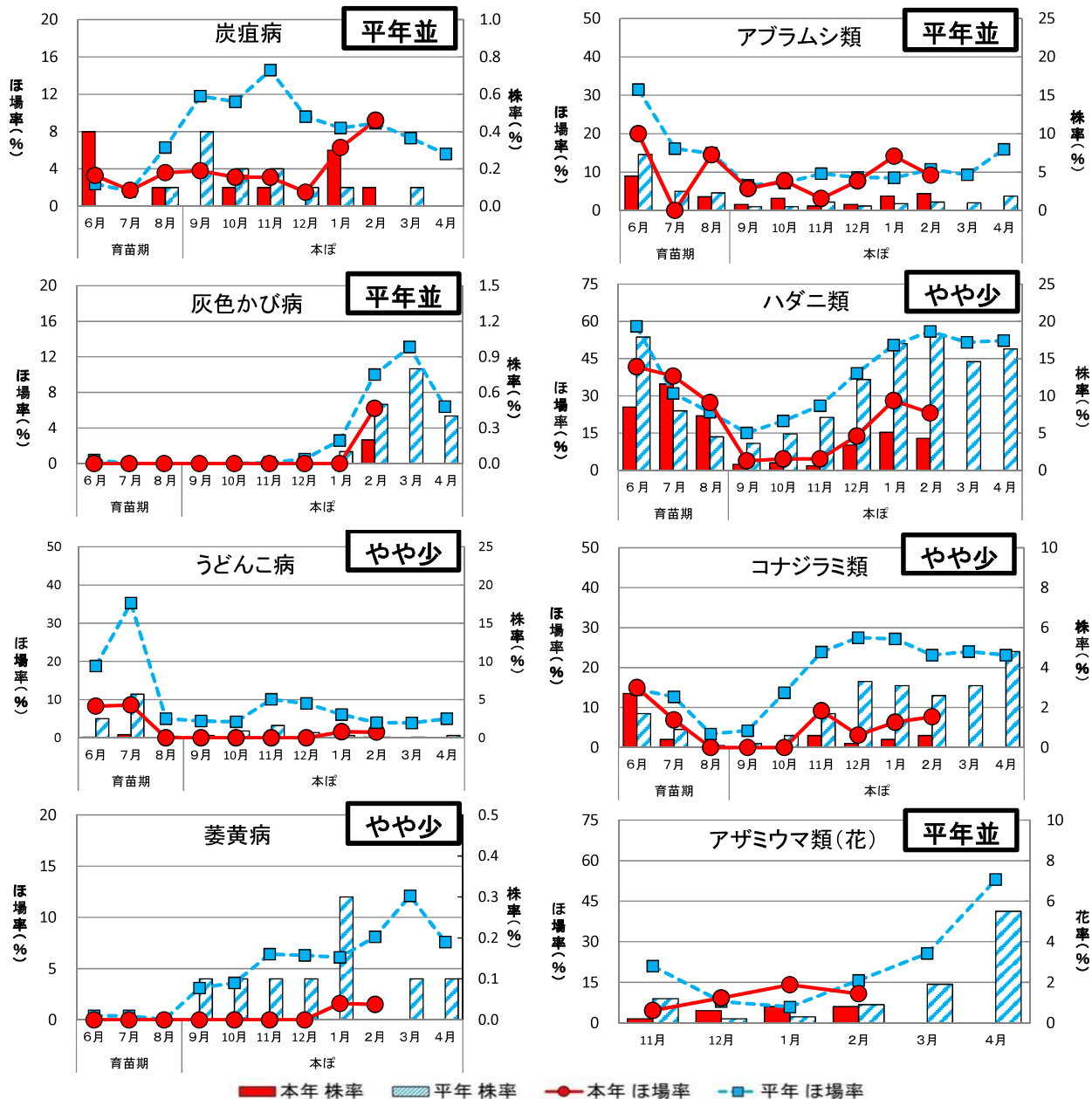
防除対策について

- 1 多湿条件で発生しやすいので、下葉を除去し株元や果房の風通しをよくする。
- 2 曇天時のかん水過多に注意し、保温状況を確認しつつ、換気時間を確保することで、ハウス内の湿度を下げる。
- 3 発病した果実や果梗、枯死した部位は伝染源となるので、ほ場を良く観察し、見つけたら速やかに取り除き、施設外で処分する。
- 4 発生初期に薬剤防除を行う。

いちご病害虫情報第9号（2月）

令和6（2024）年2月16日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

— うどんこ病の対策 —

平年よりやや少ない発生です。予防に心がけ、発生と拡大を防ぎましょう。

- 1 下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
- 2 適切な温度管理やかん水を行い、軟弱徒長を防ぐ。
- 3 ベルコートフロアブル(RACコード F:M7)等を予防的にローテーション散布する。
- 4 ほ場をよく観察し、初発を見逃さない。発生が見られたら初期のうちに、パンチョTF顆粒水和剤(F:U6、F:3)等を葉裏にもよくかかるように散布する。

■ 今月のトピックス アブラムシ類

被害症状について

イチゴには 10 種以上のアブラムシの寄生が知られていますが、現在ではワタアブラムシが発生の主体です。

ワタアブラムシは、5～6月に親株床に有翅虫が飛来し、無翅虫を産んで増殖します。無翅虫はランナー先端部や未展開葉の隙間で増殖し、多発すると葉が萎縮し、草勢が低下します。そして、本ぼの保温開始期以降は、吸汁害のほか、甘露の排出によるすす症でがくや果実が汚れ、商品価値が著しく低下します。



葉裏に密生する脱皮から



ワタアブラムシ無翅虫



がくのすす症



果実上を歩行する無翅虫



葉のすす症

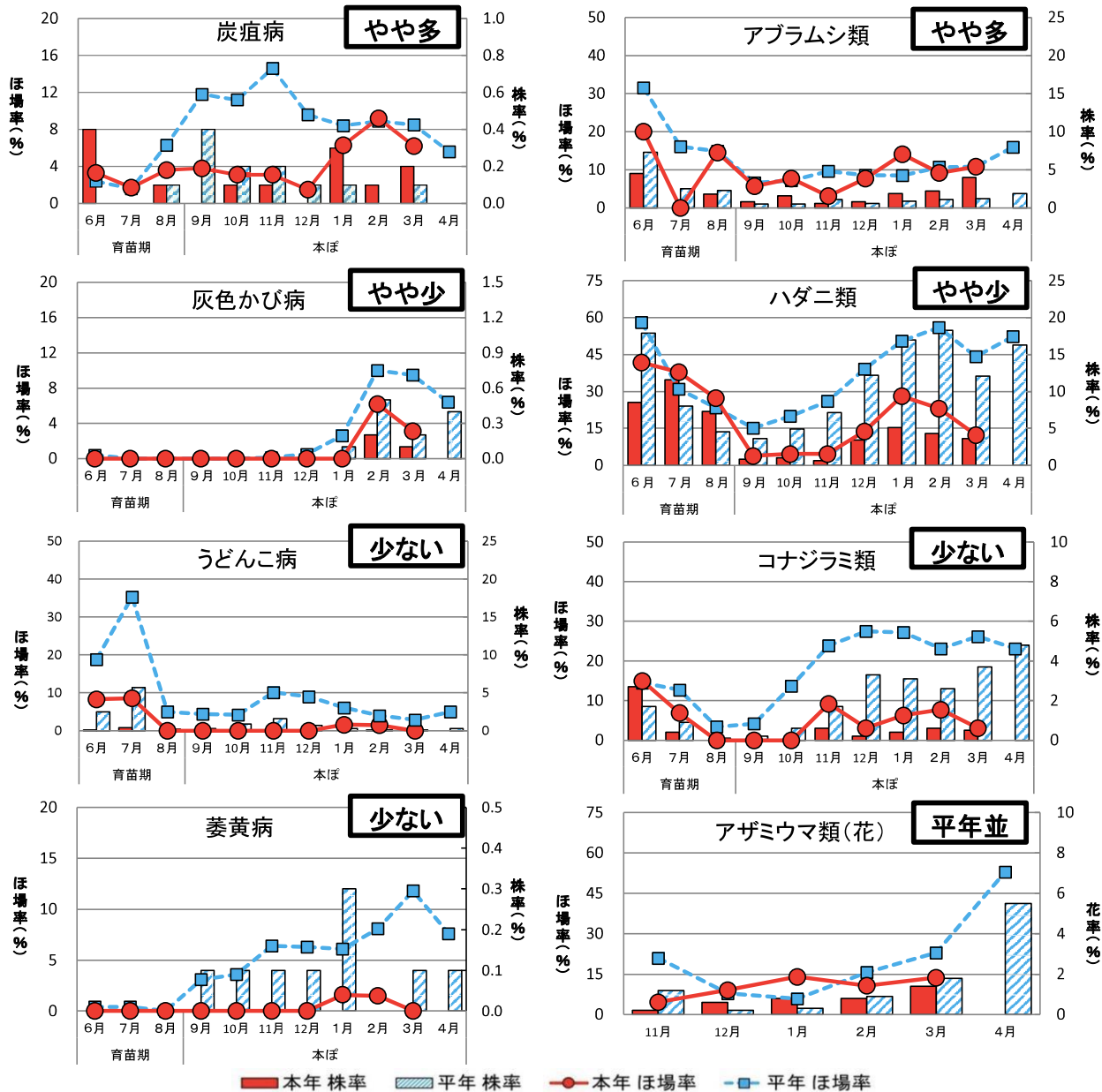
防除対策について

- ・ 施設は開口部を防虫ネットで覆い侵入を防ぎましょう。
- ・ 施設内外の雑草は増殖源となるので除草しましょう。
- ・ 薬剤散布は、かけムラのないように行いましょう。
- ・ RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- ・ 天敵を利用するときは、アブラムシの発生状況を見ながら適時に放飼し、天敵に影響の少ない農薬を散布しましょう。
- ・ 親株を適切に管理することでアブラムシの寄生していない苗を育成し、本ぼへの持込みを防ぐ。

いちご病害虫情報第10号（3月）

令和6（2024）年3月15日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー アブラムシの対策 ー

平年よりやや多い発生です。気温が上がり、増えやすい時期になるので、被害を防ぎましょう。

- 1 ほ場をこまめに確認し、増殖する前に防除を行う。
- 2 発生初期のうちに、ウララDF(RACコード I:29)等をかけムラのないように葉裏にもよく散布する。
- 3 施設内外の雑草は増殖源となるので除草する。

■ 今月のトピックス 次作にむけた防除対策

親株における対策

基本的な対策として、親株から本ぽに病虫害を持ち込まないことが基本です。
本ぽの栽培中には、本ぽから親株への病虫害の持込みを防ぐことも重要です。

本ぽにおける対策

特に本ぽで病虫害の発生が見られている場合は、病虫害の拡散を防止するため、防除対策を徹底しましょう。

- 1 本ぽ作業の後に、親株作業は控える(特にハダニは服について移動します)。
- 2 栽培終了時にはハウスの蒸し込みを行い、害虫を外に出さないようにする。
- 3 植物残さは、ハウス外に持ち出して、適切に処分する。特にクラウン部分がそのまま残らないように処分する。
- 4 土壌消毒を実施する。
- 5 施設内外の環境整備(排水対策、除草等含む)を行う。
- 6 施設開口部に防虫ネット等を展張する。必要に応じてネット等の補修を行う。

<対応する主な病虫害>

炭疽病、萎黄病、青枯病、萎凋病

アザミウマ類、センチュウ類、コナジラミ類、チョウ目害虫、ハダニ類

土壌消毒について

<消毒前>

- 植物残さ内の病原菌は消毒されにくいので、ほ場から植物残さを適切に処分する。
- 耕起、砕土を十分行う。適度な土壌水分(手で土を握ると2～3個に割れる程度)にする。

<消毒後>

- 消毒済の土に、農機具などに付着した無消毒の土が混ざらないようにする。
- 耕起は、土壌水分が低下してから行う。
- 消毒済の土に含まれる窒素量や作物に吸収可能な窒素量を一律に推定することは難しいので、施肥量はアンモニア態窒素及び硝酸態窒素等を測定して決定する。

土壌消毒の種類について

<太陽熱消毒>

有機物を混和し、小畝を立て、透明ビニルで完全被覆する。畝間に4～5日水を張り、土がぬれた状態を保ち、約30日間ハウスを密閉して、地下20cmが45℃以上を保つ。

<クロルピクリンを成分として含むくん蒸剤>

温度が低いとガス化しないため、地温7℃以上で使用する。

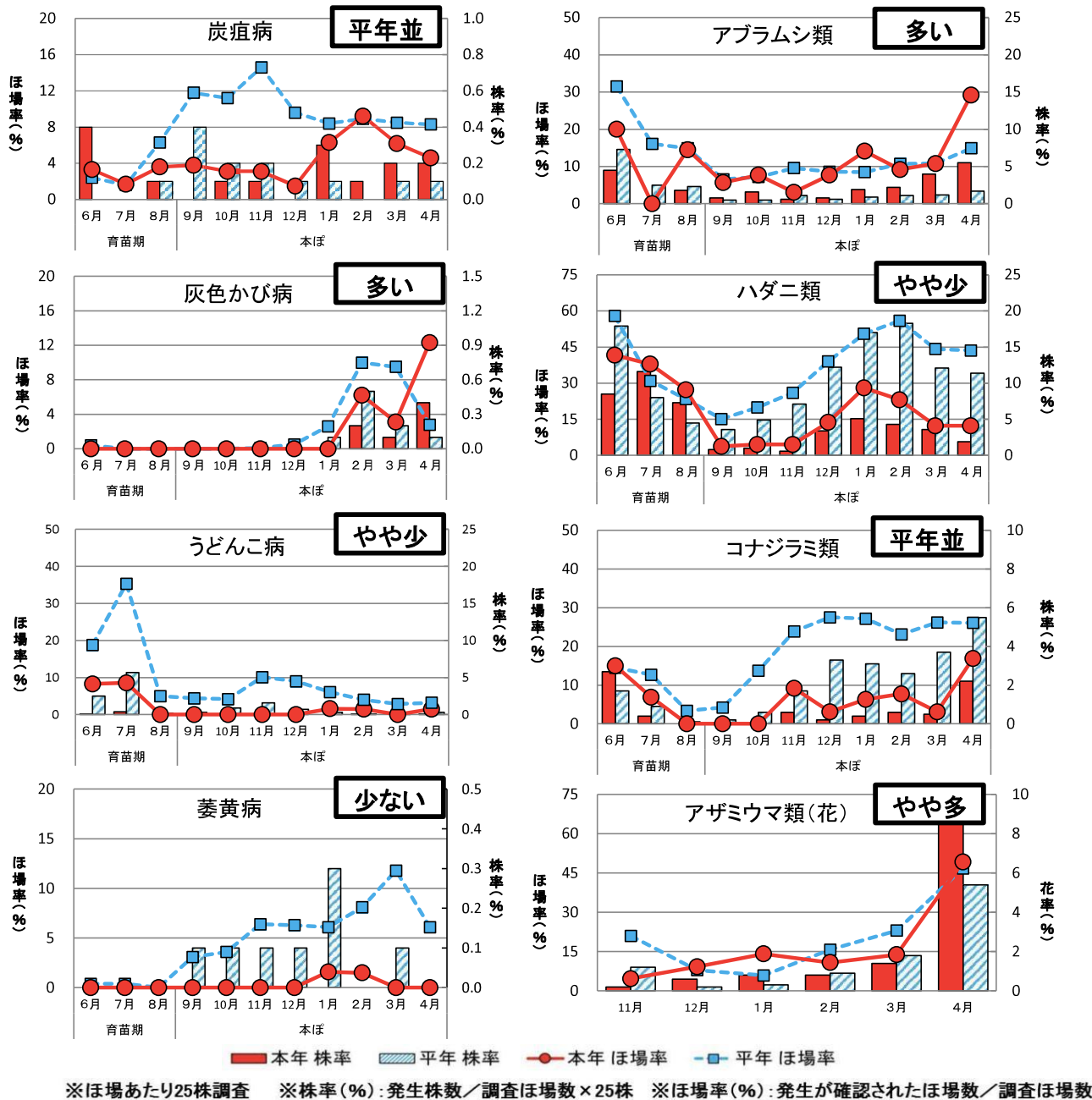
<D-Dを成分として含むくん蒸剤>

ネコブセンチュウのほか、ネグサレセンチュウにも効果が高い。

いちご病害虫情報第11号（4月）

令和6（2024）年4月19日
栃木県農業環境指導センター

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65か所】



■ 今月の防除ポイント

ー 育苗時の防除 ー

高温傾向が続くことを念頭において、適切な親苗管理を行いましょう。

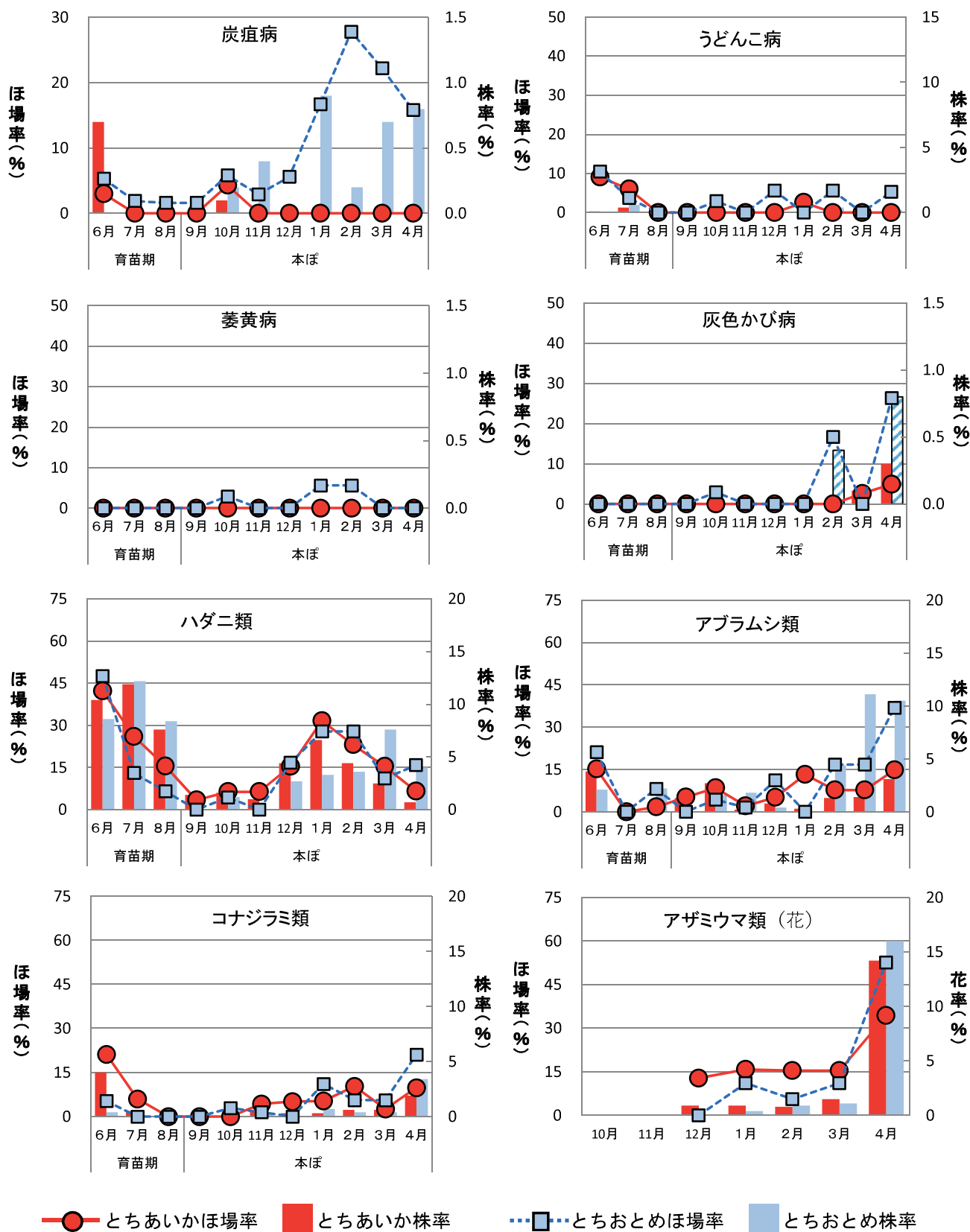
- 1 防虫ネットを展張し、アブラムシ類等の害虫の侵入を防ぐ。
- 2 除草を行い、ハダニ等の増殖源を絶つ。
- 3 適切なかん水を行い、水のはねかえり等による炭疽病、疫病の発生を防ぐ。
- 4 炭疽病、萎黄病の発病株は早急に抜き取り、ほ場外で処分する。
- 5 本ぽと親株ほ場の往来に注意し、親株への病害虫の持込みを防ぐ。

「とちあいか」「とちおとめ」品種別病害虫発生調査結果について

令和6年産のいちごの病害虫発生調査結果について、主要8病害虫の発生量の推移を品種別に集計しました。萎黄病は、前年産と同様、強い特性を持つ「とちあいか」では発生が認められませんでした。1月以降、炭疽病は「とちおとめ」で、アザミウマ類(花)は「とちあいか」で発生が多い傾向がみられました。

【調査期間：2023年6月～2024年4月 ほ場数：とちおとめ14～19、とちあいか29～39(月ごとに変動)】

■ 主要8病害虫の品種別発生推移



＜令和6(2024)年産いちご主要病害虫の発生経過＞

育苗期は、全体的に病害虫がやや少ない～平年並みで推移しました。

本ぽにおいては、秋口の高温と少雨により、ハスモンヨトウの発生が多く確認されました。また春先の高温により、灰色かび病や、秋口にほ場内に侵入したアザミウマ類等の微小害虫の発生が多くなりました。

1 炭疽病

＜発生状況＞

6～12月はやや少ない～平年並の発生で推移しましたが、1月以降は平年並み～やや多い発生となりました。

＜防除対策＞

伝染を予防するため、水の跳ね返りのない方法でかん水を行いましょう。発生前から予防的な薬剤散布を行うとともに、発病株はほ場内外に放置せず、ポリ袋などで密封し、嫌氣的発酵処理をして処分しましょう。

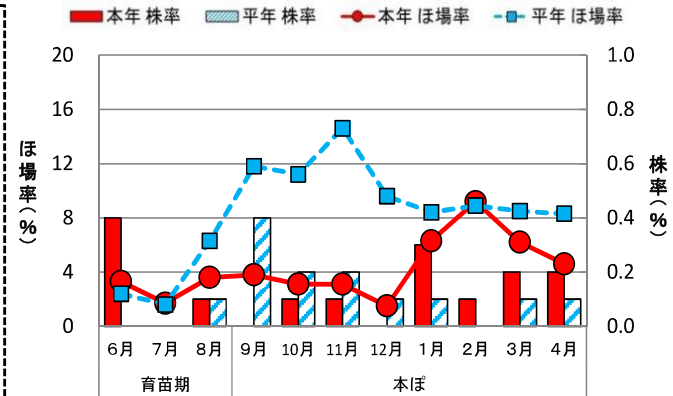


図1 炭疽病の発生ほ場率・株率

2 萎黄病

＜発生状況＞

全体的に平年より少ない発生でした。

＜防除対策＞

病原菌は土壤中で4～5年以上生存するため、本ぽで発生が確認されたほ場では土壤消毒を適切に行いましょう。

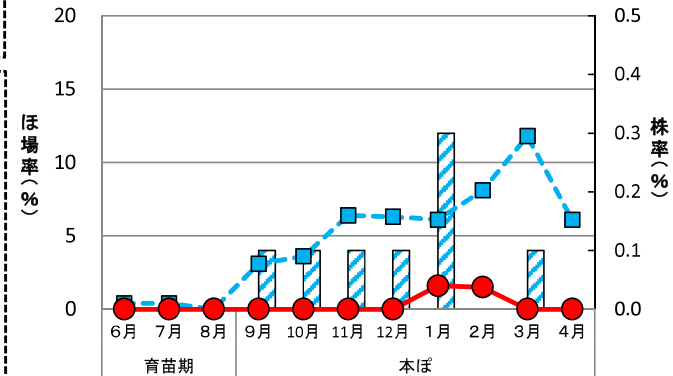


図2 萎黄病の発生ほ場率・株率

3 灰色かび病

＜発生状況＞

全体的に、少ない～平年並の発生でしたが、4月には発生が多くなりました。

＜防除対策＞

多湿条件において発生しやすいので、ハウス内が多湿にならないよう、かん水量や換気に注意するとともに、薬剤を丁寧に散布しましょう。

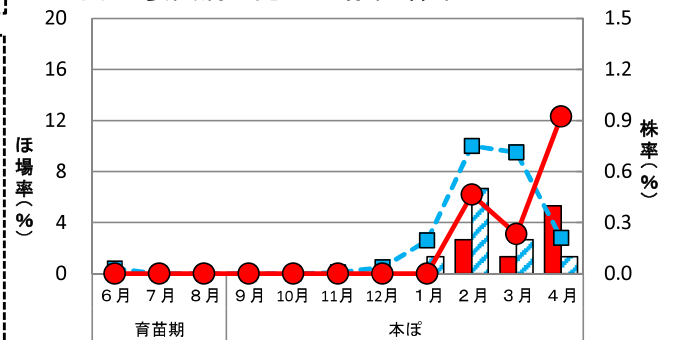


図3 灰色かび病の発生ほ場率・株率

4 うどんこ病

＜発生状況＞

育苗にはやや少なく推移し、本ぽでは、少ない～やや少ない発生となりました。

＜防除対策＞

育苗期の防除を徹底し、本ぽに病原菌を持ち込まないようにしましょう。

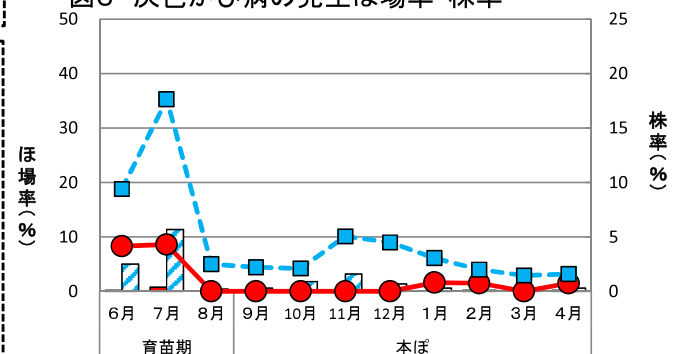


図4 うどんこ病の発生ほ場率・株率

5 ハダニ類

＜発生状況＞

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

＜防除対策＞

早期発見・早期防除に努め、天敵製剤（カブリダニ類）を使用する場合は、ハダニ類の発生前に放飼しましょう。

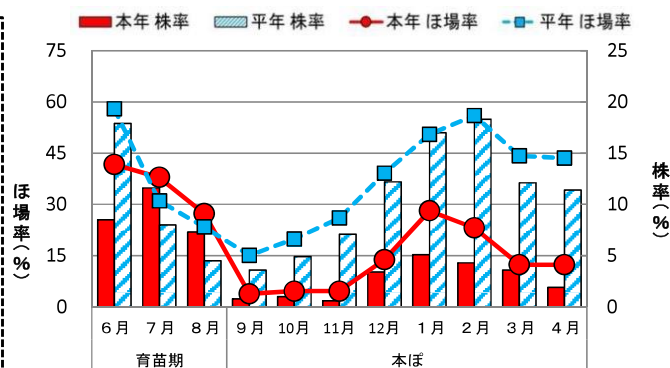


図5 ハダニ類の発生ほ場率・株率

6 ハスモンヨトウ

＜発生状況＞

本ぼでは10、11月に発生が多くなりました。

＜防除対策＞

幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、早期発見・早期防除に努めましょう。また、若齢幼虫が集団でいるうちに葉ごと摘み取り、処分しましょう。

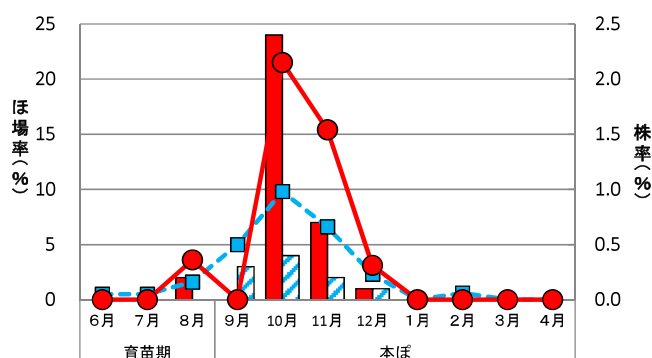


図6 ハスモンヨトウの発生ほ場率・株率

7 アブラムシ類

＜発生状況＞

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られました。全体的に平年並～やや多い発生で推移し、4月には発生が多くなりました。

＜防除対策＞

早期発見・早期防除に努めるとともに、葉裏にも薬剤がよくかかるよう丁寧な薬剤散布を心がけましょう。

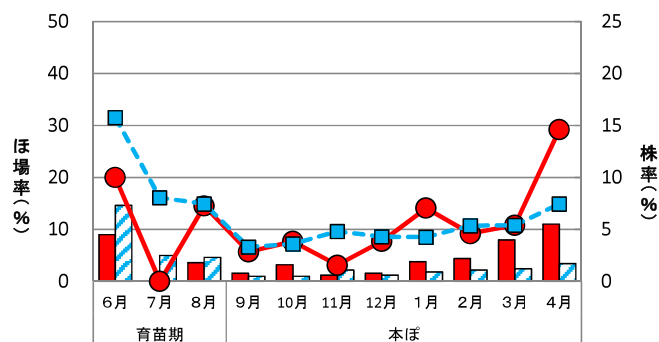


図7 アブラムシ類の発生ほ場率・株率

8 アザミウマ類

＜発生状況＞

11月から発生が確認され、12月にはやや多く、1月には多く推移し、4月には発生が多くなりました。

＜防除対策＞

開花初期にハウス外から侵入したアザミウマが多いと春先の発生につながることから、秋の防除を徹底しましょう。春期の飛び込みがあるので、適切に防除しましょう。

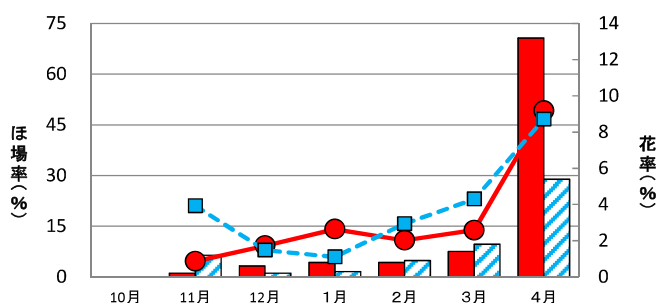


図8 アザミウマ類の発生ほ場率・花率

育苗期間中に病虫害防除を徹底し、本ぼへの持込みを防止しましょう。

■ 今月の防除ポイント

親株と本ぽの管理作業が重なる時期です。本ぽで発生している病害虫を親株に持ち込まないよう、本ぽの管理作業後に親株の管理作業を行わないようにしましょう。親株で病害虫の発生を確認した場合、速やかに防除し、苗や次作の本ぽへの持込みを防止しましょう。

－ 炭疽病 －

親株での発生は、被害が大きくなるため、防除対策を徹底しましょう。

1. 主に、6月下旬から9月下旬にかけて発生しますが、高温の時期に特に発生しやすくなります。
2. 頭上かん水は控え、できるだけ水の跳ね返りがないような株元かん水等を行いましょう。
3. 発病株は見つけしだい取り除き、肥料袋等に詰め、空気を排出し口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理を十分に行った後に処分しましょう。
4. 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から定期的に予防散布を行いましょう。

－ ハダニ類 －

気温の上昇で発生が多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょう！

1. 本ぽで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ぽ作業後に親株の管理作業を行わないようにしましょう。
2. 育苗期の薬剤散布にあたっては、収穫前使用日数の長いトクチオン乳剤（I:11B 収穫75日前まで）やアグリメック（I:6 親株育成期、育苗期）等を効果的に使用しましょう。
3. 雑草はハダニ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょう。
4. 気門封鎖剤や天敵製剤を活用することで、作全体の化学農薬の散布回数を減らし薬剤感受性の低下を防ぎましょう。また、気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布しましょう。

－ アブラムシ類 －

気温が高く、飛び込みが多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょう！

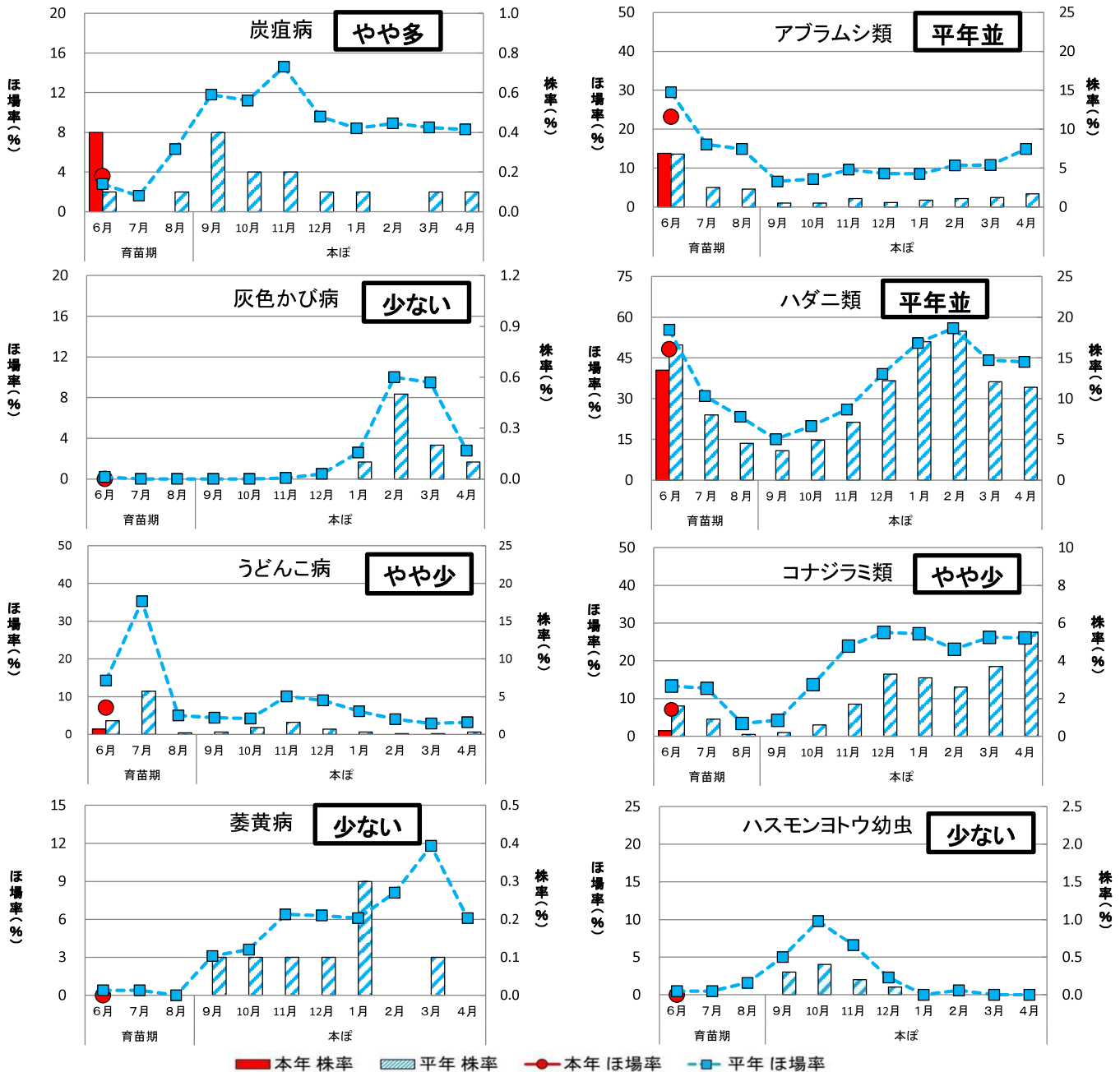
1. 雑草はアブラムシ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょう。
2. 施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、アブラムシ類の侵入を防ぎましょう。

3. 発生初期から薬剤を散布しましょう。薬剤感受性の低下を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

いちご病害虫情報第1号（6月）

令和6（2024）年6月21日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：56か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー 炭疽病の対策 ー

高温・多湿条件で発生が拡大しやすい病害のため、高温が予想されている本年は多発のおそれがあります。発生初期の対策が重要なので、予防を主体とした防除対策を徹底しましょう！

- 1 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から、ベルコートフロアブル(RACコードF:M 7)等を定期的に予防散布する。
- 2 分生子の飛散・伝染を防ぐため、頭上かん水は控え、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
- 3 罹病株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理(罹病株を肥料袋等に詰空気を排出して口をしっかりと閉じ、日当たりのよい野外に放置する)後に処分する。

■ 今月のトピックス うどんこ病

症状について

うどん粉をまぶしたような白色のカビによる病害(写真1～8)。長雨等の過湿や日照不足で軟弱徒長した株、過繁茂した株で多く発生する。うどんこ病が発病したつぼみでは、花弁がピンク色に変色することがある(写真5)。

防除対策について

- 1 薬剤防除は予防を主体に行う。薬剤には展着剤を加え、葉裏にも薬液が良くかかるようにていねいに散布する(育苗期・本ぽ)。
- 2 育苗時からの防除を徹底し、本ぽに菌を持ち込まないようにする(育苗期)。
- 3 葉(老化葉等)を除去し株元や花房の風通しを良くする(本ぽ)。
- 4 寒暖差による結露や、かん水過多にならないように注意する(本ぽ)。
- 5 気温上昇時は、施設内の換気を行う(本ぽ)。
- 6 曇雨天時にはくん煙剤を使用する。硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける(本ぽ)。
- 7 ボーベリアバシアーナ剤などの微生物農薬は、一部の微小害虫にも効果が期待できる。

《葉での病徴》



写真1 葉表



写真2 葉裏



写真3 果梗

《花・花柄・果実での病徴》



写真4
がくと果柄



写真5
花弁の変色



写真6 被害果(未熟)



写真7 被害果(成熟)

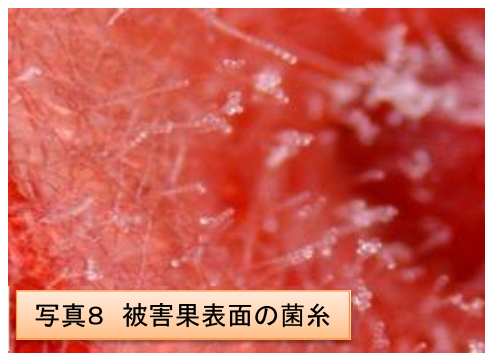
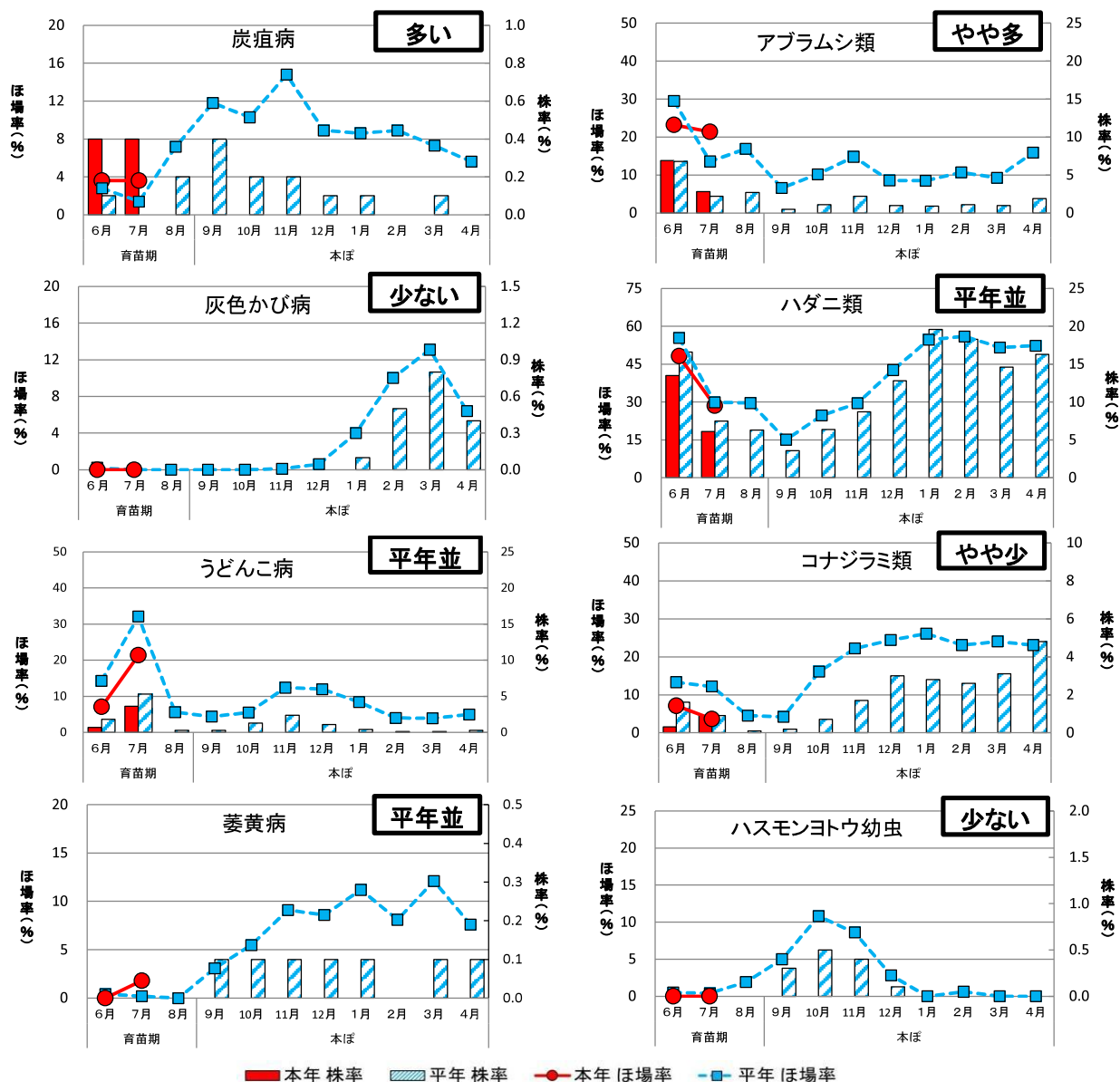


写真8 被害果表面の菌糸

いちご病害虫情報第2号（7月）

令和6（2024）年7月19日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：56 か所】



■ 今月の防除ポイント

一 育苗期のハダニ類防除 一

ハダニ類は平年並の発生量となっています。本ほでの発生量を抑えるためには、育苗期における防除を徹底し、本ほにハダニ類を持ち込まないことが重要です。

- 1 育苗期の薬剤散布には、天敵や使用時期を考慮してトクチオン乳剤（RACコード I:1B、収穫75日前まで）やアグリメック（I:6、親株育成期、育苗期）等を使用しましょう。また、モベントフロアブル（I:23）を育苗期後半～定植当日に灌注しましょう。
- 2 定植後に天敵導入する際は、天敵に影響の少ない薬剤を計画的に散布しましょう。
- 3 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 4 定植前に高濃度炭酸ガス処理を適切に行い、本ほへのハダニ類の持ち込みを抑えましょう。

■ 今月のトピックス イチゴ炭疽病

被害について

イチゴ炭疽病は高温期であるいちごの育苗期間中に発生し、育苗期の後半になるにしたがって発生が多くなる難防除病害です。

病徴は、葉では薄墨色の斑点型病斑が発生します（写真1）。葉柄やランナーでは、黒色の陥没した病斑を生じ（写真2）、多湿時には病斑上に鮭肉色の分生子塊を形成します。

クラウンに感染した場合には、株が萎凋して枯死（写真3）し、クラウン外部から内部に向かって褐変腐敗が進みます（写真4）。

主な伝染方法は、**水滴伝染**です。降雨や頭上かん水による水はねで感染株から分生子が飛散することで感染が広がります。

防除対策について

- 1 頭上かん水は控え、できるだけ水の跳ね返りのない方法でのかん水を行う。
- 2 発病が確認された株は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- 3 発病株の周辺の株は定植苗として使用しない（潜在感染のおそれ）。
- 4 症状が出てからの防除は困難であるため、予防を主体とした薬剤散布を行う。
- 5 定植前に本ぼの土壤消毒を行う。



写真1 葉上の斑点型病斑



写真2 葉柄の陥没病斑



写真3 苗の萎凋症状

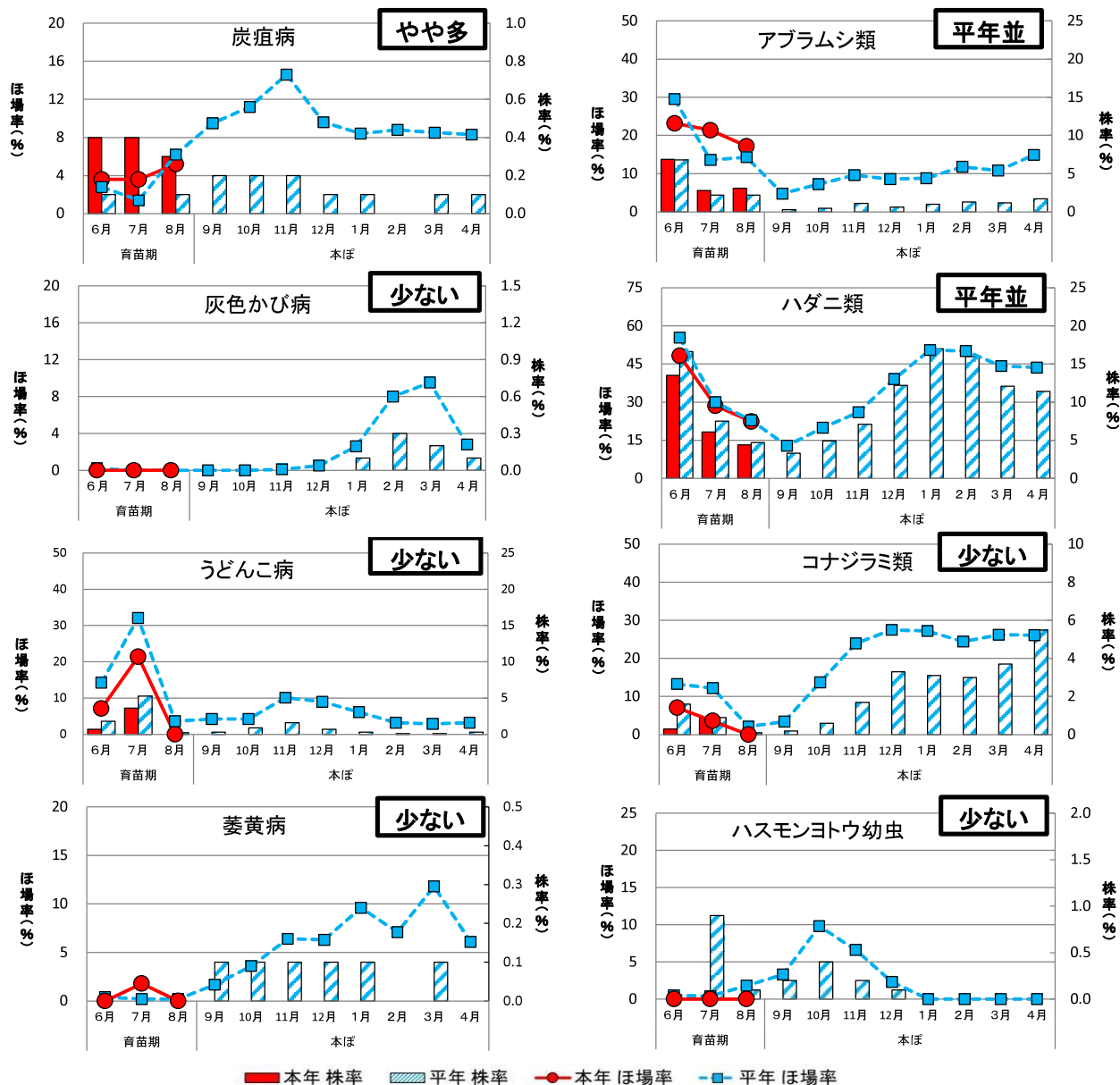


写真4 クラウン内部の褐変

いちご病害虫情報第3号（8月）

令和6（2024）年8月23日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：58 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー 定植前の炭疽病対策 ー

本県において9～11月は、炭疽病の発生ほ場率・株率が高い時期です。今年は気温の高い状態が続いているため、例年以上に発生に注意しましょう。

【防除対策】

- 1 雨よけ栽培を基本とし、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行うのが望ましい。
- 2 本ほへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 3 発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
発病株周辺の株は、発病が認められなくても潜在感染している可能性があるため、早急に取り除きほ場外で適切に処分する。

■ 今月のトピックス ハスモンヨトウ

生態と被害

卵塊（写真1）は毛に覆われた状態で葉裏に産み付けられる。

幼虫は、若齢（写真3）のうちは集団で葉を食害し不整形でカスリ状の食痕をつくる（写真2）。中・老齢（写真4・5）になると周囲の株へと分散し旺盛に食害し、昼間は地際や日陰に隠れるようになる。

幼虫は、頭の後ろに1対の大きな黒い斑紋のあるのが特徴である。

防除対策について

- 1 ほ場周辺の雑草は発生源となるため、除草を行う。
- 2 成虫の侵入を阻止するため、施設の開口部や出入り口に防虫ネット（目合4～5mm）を展張する。施設のパイプ等に産卵することもあるので注意する。
- 3 ほ場内の観察により早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
- 4 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。



写真1 葉上の卵塊



写真2 寄生葉



写真3 若齢幼虫



写真4 中齢幼虫



写真5 老齢幼虫

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課(Tel 028-665-1244)までお問合せください。

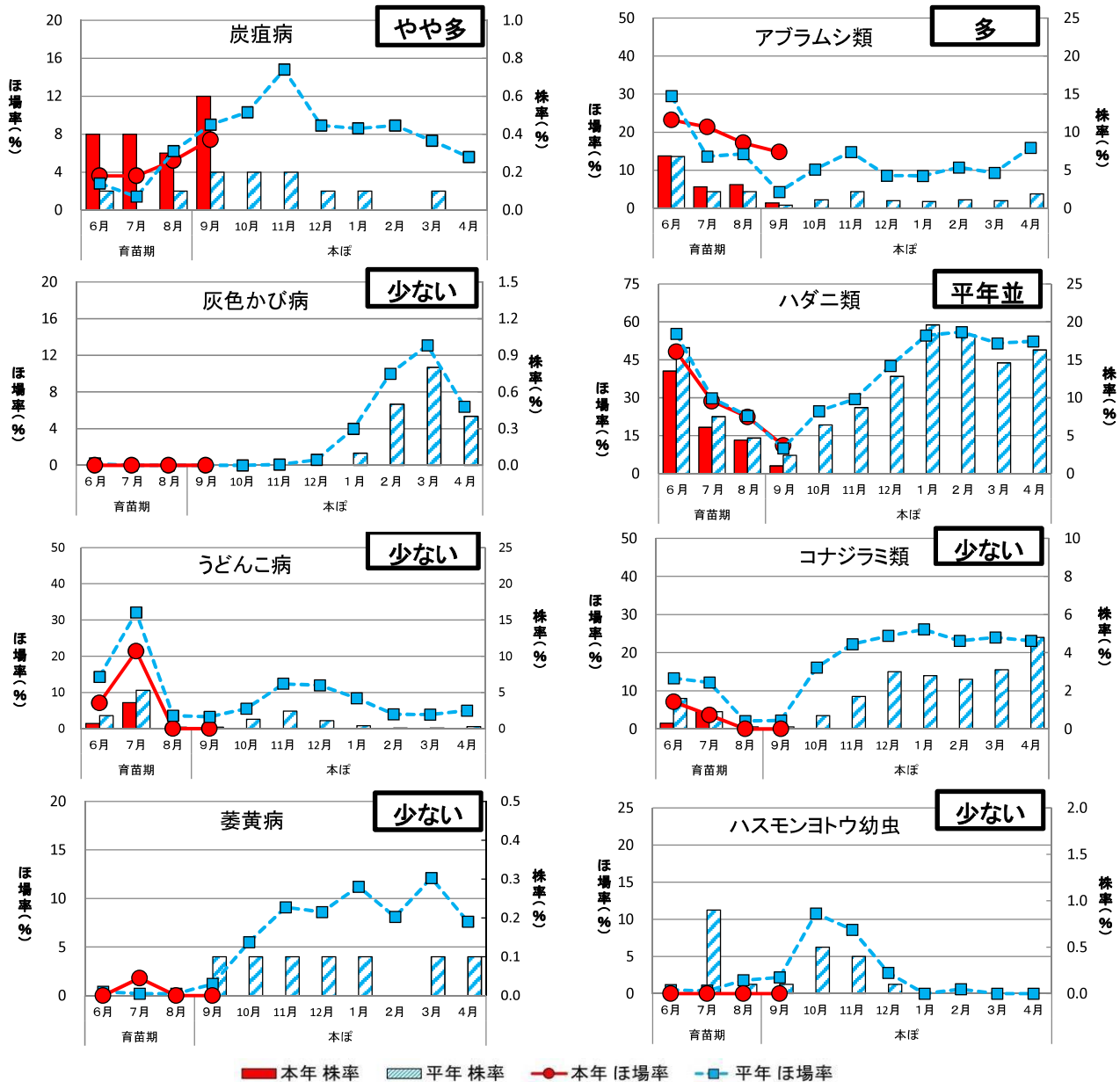
病害虫情報発表のお知らせはX(旧ツイッター)「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ(<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>)でもご覧になれます。



いちご病害虫情報第4号（9月）

令和6（2024）年9月20日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：54 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー ハスモンヨトウの対策 ー

ほ場をよく観察し、発生初期の段階で防除を行いましょう。

- 1 定期的にほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。施設のパイプ、ネット等の資材にも産卵することもあるので注意して観察する。
- 2 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
- 3 施設開口部には防虫ネットを展張する。
- 4 ほ場周辺の雑草は発生源になるため、雑草管理を徹底する。

■ 今月のトピックス アザミウマ類

いちごに寄生するアザミウマ類

アザミウマ類はいちご栽培において重要な害虫となっています。県内いちご栽培ほ場における主要種はヒラズハナアザミウマ（写真1）で、ハナアザミウマ（写真2）やミカンキイロアザミウマ（写真3）も見られます。体長はいずれの種も1～2mmで、現場での種の識別は困難です。

アザミウマ類の発生を確認するには、ルーペでの花の観察の他、白い紙等の上で花を軽く叩く方法があります。アザミウマ類が発生していれば、花を叩くと細長く褐色または淡黄色の小さな虫が紙の上に落ち、観察することができます。



写真1 ヒラズハナアザミウマ成虫



写真2 ハナアザミウマ成虫



写真3 ミカンキイロアザミウマ成虫

アザミウマ類の生態と被害

アザミウマ類は主に花に寄生し、成虫は主に花粉を、幼虫は花床の表面等を食害します（写真4、5）。幼虫に加害されると果実肥大後にそう果（種に見える部分）の周囲を残して表面が褐変し、商品価値が低下します（写真5）。



写真4 花上の成虫(赤丸内)



写真5 果実の被害

アザミウマ類の生態と防除

野外のアザミウマ類は10月頃まで活発に動き回ります。そのため、10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、アザミウマ類の飛び込みが多くなる傾向にあります。ほ場周辺の雑草は発生源となるため、除草を徹底しましょう。

施設内で観察した花の1割以上にアザミウマ類が発見された場合、速やかな防除が必要です。ほ場をよく見回り、発生初期のうちに防除しましょう。天敵を利用するときは薬剤の選択に留意しましょう。

秋に被害が発生したハウスでは、2月頃からの被害発生に特に注意しましょう。

[防除のポイントNo.19](#) を当センターHPに掲載中です。

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課(Tel 028-665-1244)までお問合せください。

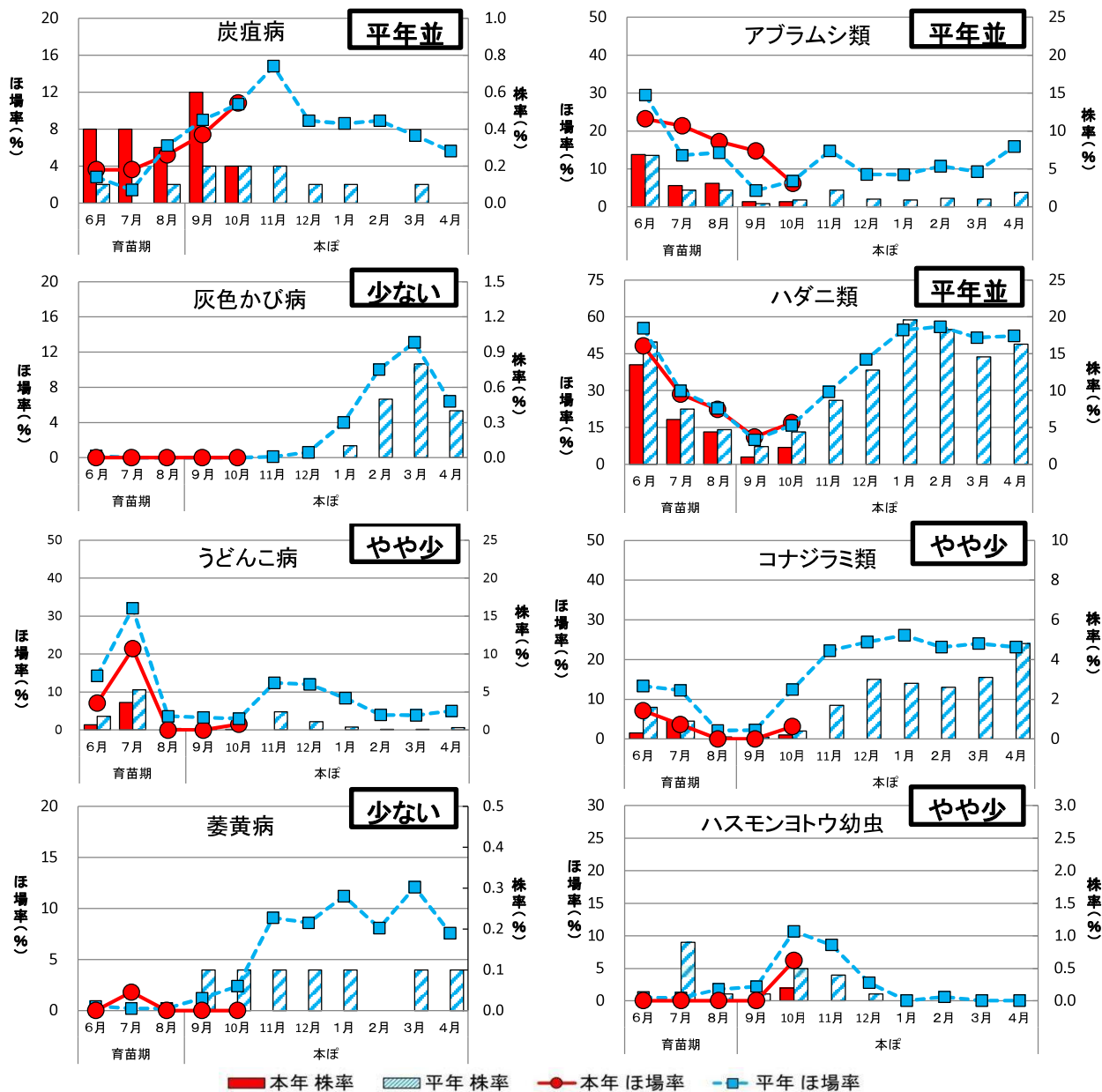
病害虫情報発表のお知らせはX(旧ツイッター)「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ(<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>)でもご覧になれます。



いちご病害虫情報第5号（10月）

令和6（2024）年10月18日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数：65 か所】



※ほ場あたり25株調査 ※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株 ※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー アザミウマ類の防除対策 ー

野外のアザミウマ類は11月頃まで活発に活動します。10月中旬までに開花が進んだほ場では、アザミウマ類の野外からの侵入が多くなる傾向にあります。冬季の発生は、ハウス内の残存個体に由来するため、よくほ場を観察し、適切に防除を行いましょう。

- 1 ハウス内外の除草を行うほか、ハウス内の不要な植物を除去する。
- 2 花をよく観察し、その1割以上にアザミウマ類が認められる場合には、薬剤防除を行う。なお、薬剤は、花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して選択する。
- 3 薬剤感受性の低下を避けるため、必ず RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

■ 今月のトピックス ハダニ類

被害について

ハダニ類（写真１）は、県内の促成栽培いちごにおいて親株から栽培終了時まで周年で発生し、多発すると株の生育不良や果実品質低下等の被害が生じます。

ハダニ類は化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、RACコードの異なる薬剤のローテーション散布を行いましょう。天敵製剤（写真２）や気門封鎖剤は、薬剤感受性の低下したハダニ類に対しても有効であり、薬剤の散布回数を大幅に減らすことができるため、積極的に活用しましょう。

天敵製剤(カブリダニ類)の使用にあたって

- 天敵製剤は必ずハダニ類の発生前に放飼する。ハダニ類の発生が多いときは、放飼前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を使用し、ハダニ類の密度を下げる。
- ハウス内をこまめに見回り、天敵が定着・増殖していることを確認する。状況に応じて追加放飼することにより、安定した効果が期待できる。

気門封鎖剤(物理的防除剤)の使用にあたって

- 直接ハダニ類にかからなければ効果が得られないため、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- 気門封鎖剤の多くは殺卵効果がないため、卵から孵化した幼虫・成虫に対して５～７日程度の間隔で複数回散布する。



写真１ ナミハダニ雌成虫（いちごでの主要種）
（光沢のない楕円形：約 0.6 mm）



写真２ チリカブリダニ成虫（ハダニ類の天敵）
（光沢のある涙形：約 0.5 mm）

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課
（TEL 028-665-1244）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部
（@tochigi_nousei）」、農業総合研究センターホームページ
（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でも
ご覧になれます。



令和6(2024)年11月22日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

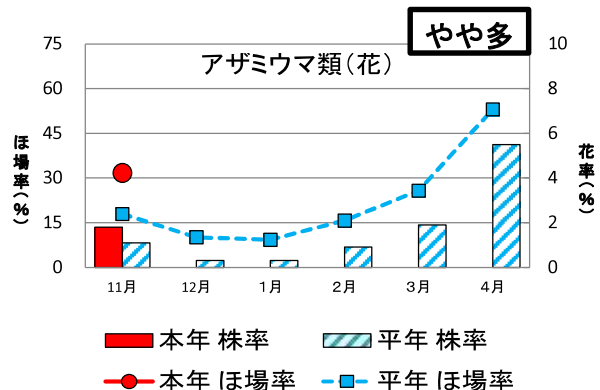
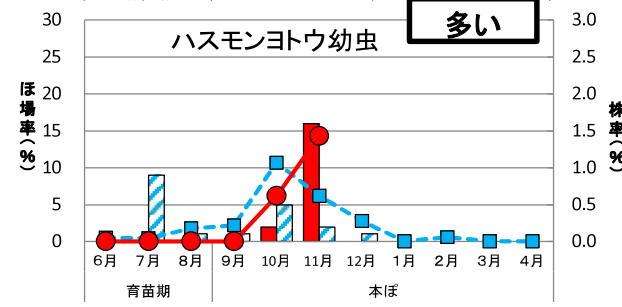
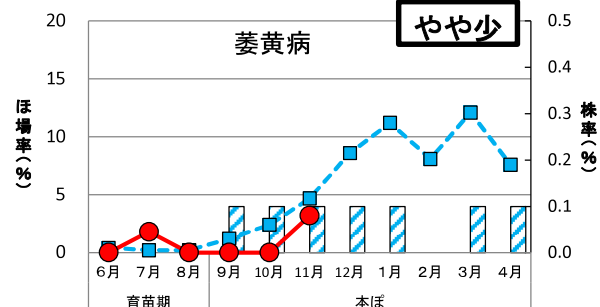
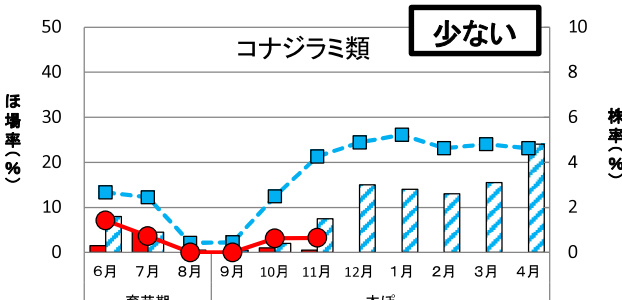
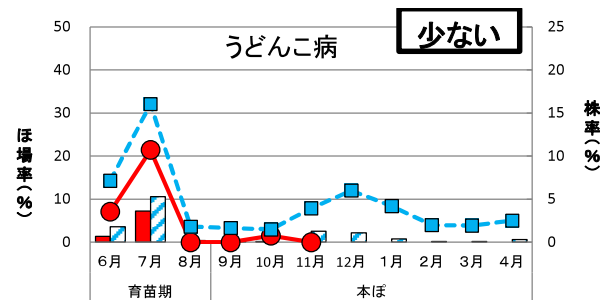
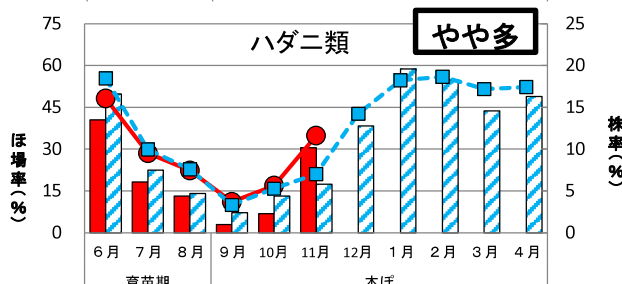
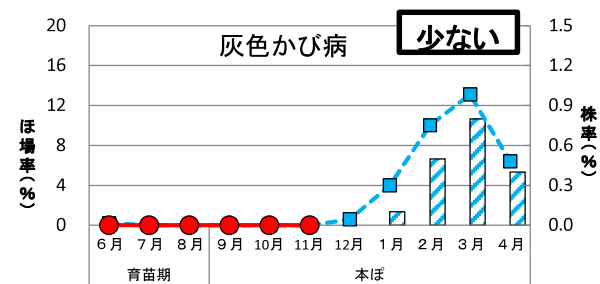
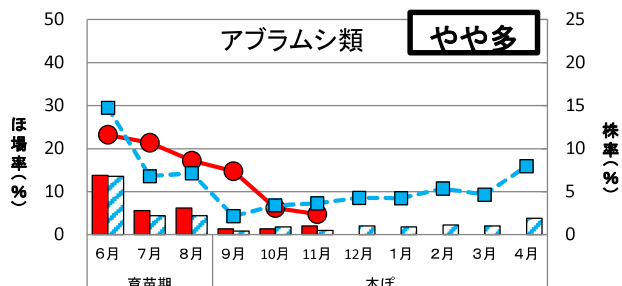
炭疽病

やや少

月	増率率 (%)	株率 (%)
6月	8.0	0.15
7月	8.0	0.10
8月	5.5	0.25
9月	12.0	0.40
10月	11.0	0.55
11月	3.0	0.70
12月	0.0	0.40
1月	0.0	0.40
2月	0.0	0.45
3月	0.0	0.35
4月	0.0	0.25

育苗期

本ぼ



※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

- 1 ほ場をこまめに観察し、早めに防除する。
- 2 薬剤感受性低下を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- 3 天敵製剤や気門封鎖剤を活用する。天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、導入前に天敵に影響の小さい薬剤で

■ 今月のトピックス 越冬前の害虫防除

この時期の対策で冬～春の被害を抑える

近年は秋になってからも気温が平年より高く推移しているため、害虫の活動期間が長くなっています。それでも、霜が降りる時期になると、日中・夜間の温度低下により昆虫の活動は停止し、一部は死滅します。ハウスの開口部を開ける時間も短くなり、飛翔によりハウスへ侵入するアブラムシ類、アザミウマ類、コナジラミ類、チョウ目（ハスモンヨトウ、オオタバコガ）等の侵入リスクは低下します。一方で、既にハウス内へと侵入した害虫は翌春まで発生し続けることになります。この時期の防除対策をしっかりと実施することで、翌春までの被害の低減が期待できます。

ハウス内で越冬する害虫を減らすコツ

- チョウ目の蛹やアザミウマ類の卵・蛹は、土中や植物の組織内部に存在するため、薬剤が届きにくいです。ハウス内で害虫の発生量が多いと様々な发育ステージが混在するので、一度の防除では生き残る虫が多く、短期間で害虫密度が再び増加するおそれがあります。間隔をあけて複数回の防除を実施し、十分に密度を下げましょう。



写真1 ハスモンヨトウ幼虫



写真2 オオタバコガ幼虫と花の被害

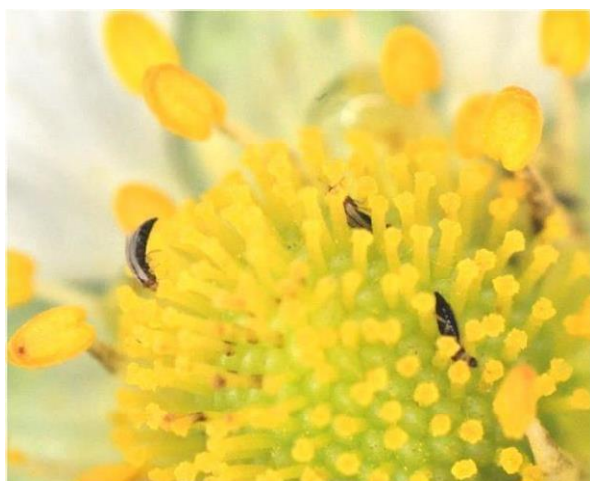


写真3 花に寄生するアザミウマ類



写真4 アザミウマ類による果実の褐変

- 葉数が増えてくると、株元や葉裏のアブラムシ類、コナジラミ類、ハダニ類等の発生に気づきにくくなり、薬剤もかかりにくくなります。適切に葉かきを行い、薬剤散布時には展着剤を使用することで、防除効果の向上が期待できます。薬剤

散布時には葉裏や株元への薬液の付着状況を必ず確認し、不十分な場合には、薬液の付着を意識しながら噴口の向きや動かし方を工夫しましょう。



写真5 オンシツコナジラミ
成虫と卵



写真6 ワタアブラムシ



写真7 マルチ上に付着した
アブラムシ類の脱皮殻



写真8 アブラムシ類による株元とマルチの汚れ

- アブラムシ類やコナジラミ類は、盛んに“甘露”を排出し、すす病の原因となります。発生すると、寄生株の葉や直下のマルチ上にポツポツとした甘露の跡を残すため、注意深く観察して早期発見に努めましょう。アブラムシ類では、甘露の跡に加え、マルチ上に多数の脱皮殻がみられる点も重要な観察ポイントです。
- ハウス入り口付近や、内張りとは外張りの間等には、雑草が繁茂しやすく、各種害虫の温床となります。特に、各種の微小害虫は、雑草上で発生していても気づきにくいので、こまめな除草に努めましょう。
- この時期にハウス内の害虫密度をしっかりと下げることで、来年の春先の害虫発生を抑えることができます。なお、天敵資材を導入しているハウスでは薬剤選択に注意しましょう。

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課
(Tel 028-665-1244) までお問合せください。

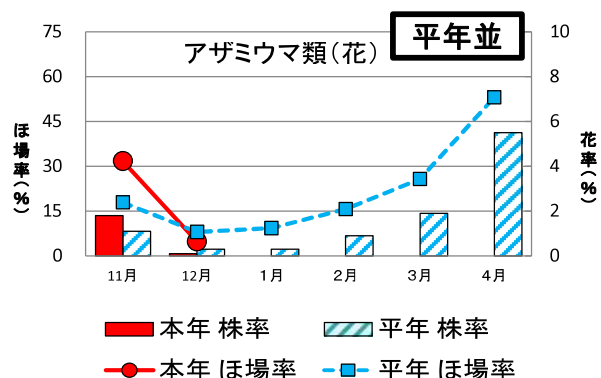
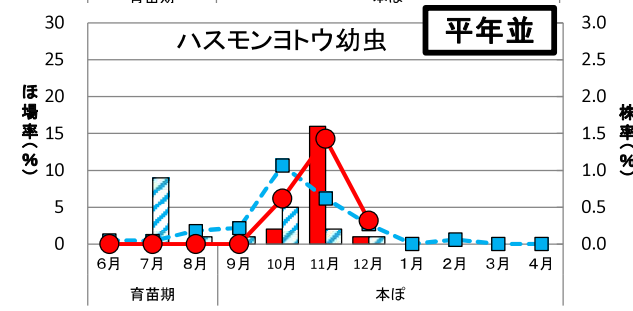
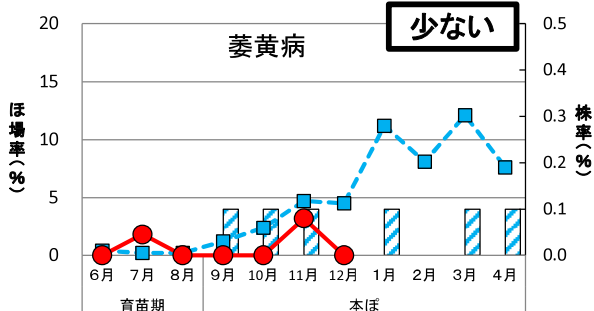
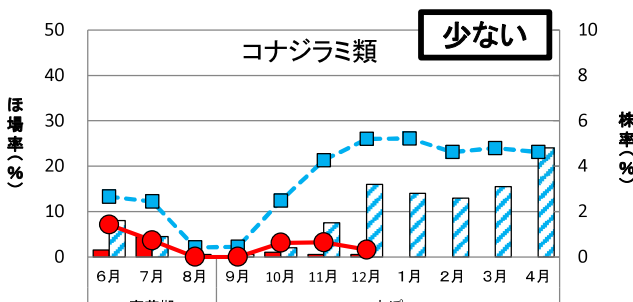
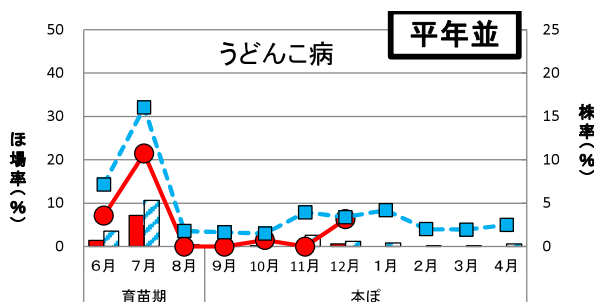
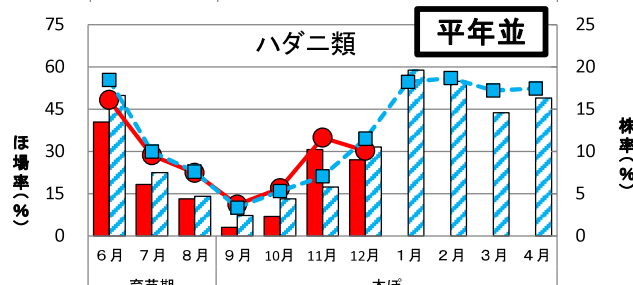
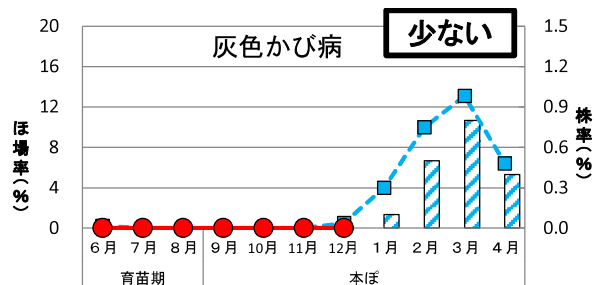
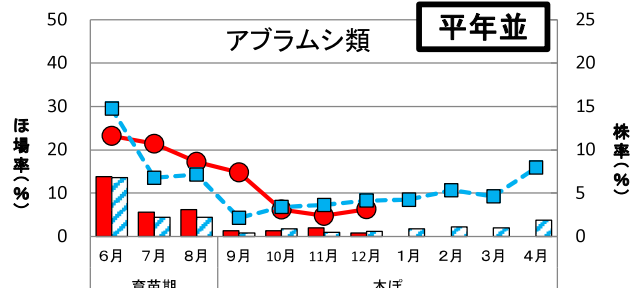
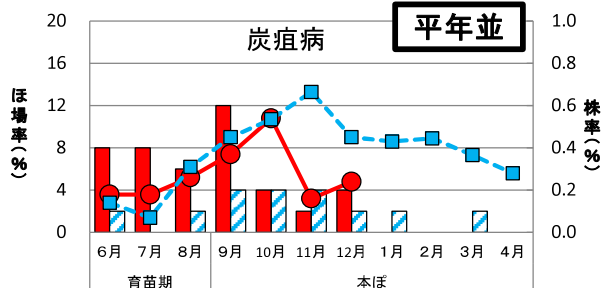
病虫害情報発表のお知らせはX(旧ツイッター)「栃木県農政部
(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ
(<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>)でも
ご覧になれます。



いちご病害虫情報第7号（12月）

令和6（2024）年12月20日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

■ 病害虫の発生状況 【総調査ほ場数 63 か所】



※ほ場あたり25株調査

※株率(%)：発生株数／調査ほ場数×25株

※ほ場率(%)：発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■ 今月の防除ポイント

ー うどんこ病の防除対策 ー

多発してからの防除は難しいため、予防対策と初期防除を徹底しましょう。

- 1 下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
- 2 ベルクートフロアブル(RACコード F:M7)等を予防的にローテーション散布する。
- 3 発生初期のうちに、パンチョTF顆粒水和剤(F:U6・3)等を葉裏にもよくかかるように散布する。

■ 今月のトピックス 灰色かび病

被害症状について

主に果実に発生し、がく、果梗、葉、葉柄など地上部のあらゆる組織を侵します。はじめ淡褐色の病斑を生じ、急速に拡大して果実を軟化腐敗させ、表面に灰色粉状のカビを密生します。病斑上に形成される胞子が飛散して、空気伝染し、蔓延します。

本病は、気温が20℃前後で湿度が高い場合に発病しやすく、施設内の多湿、朝夕の冷えこみによる植物体の結露が発生を助長します。また、例年1月頃から発生し始め、3月に最も発生が多くなる傾向があるため、日頃からほ場内をよく観察し、発生を見逃さないように注意しましょう。

防除対策について

- 多湿条件で発生しやすいので、下葉を除去し株元や果房の風通しをよくする。
- 曇天時のかん水過多に注意し、保温状況を確認しつつ、換気時間を確保すること、ハウス内の湿度を下げる。
- 発病した果実や果梗、枯死した部位は伝染源となるので、ほ場を良く観察し、見つけたら速やかに取り除き、施設外で処分する。
- とちあいかの栽培において、芽数を多く残すと内側に伸びやすいため、花房を外側に向け、果実が取り残されないように注意する。
- 薬剤散布は予防主体に行う。薬剤耐性菌が発生しやすいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

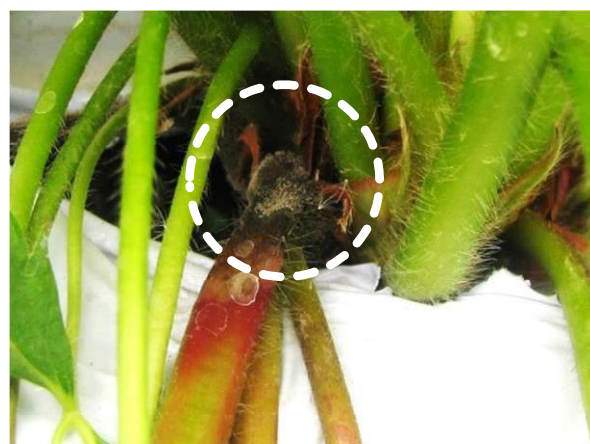


胞子

果実の症状



果実・がくの症状



葉柄基部の症状